



東京都八王子市
元八王子市生ごみリサイクルリーダー 土方 彰子 さん

Q 差し支なければ、年齢と出身地を教えてください。

A 1944年、茨城県水戸市の生まれ。78歳です。

Q ごみ問題に関心をもつようになったのは何故ですか？

A 結婚して筑波山に見える畑の中の借家に移りました。当時は高度経済成長期で大量消費の中での過剰包装が気になっていました。借家には庭があったので、生ごみを埋めたり、紙ごみを燃やしたりして、ごみを減らすことをしていました。

その後八王子市に移り、増え続けるごみを前にして何とかならないか思っていました。

1990年頃、ドイツから留学生が我が家にホームステイすることになり、ドイツのごみ分別の最先端を学ぶ機会を得ました。ドイツではごみ削減のため、野菜や肉など生鮮食品の量り売りや牛乳などの使用済み容器を返却させるデポジット制、紙ごみの徹底した分別などが行われており、「ごみは資源、混ぜればごみ」が言葉通りだと実感しました。

その頃、八王子市でもごみ削減を目指す「ゴミ市民会議」が設けられ、私もその一員として市の分別回収のシステム作りに参加することになりました。これをきっかけに回収業者「八王子容器」の赤羽さんと知り合い、彼の呼びかけにより、1992～4年頃に市内の住宅4地区で新聞紙、ダンボール、びん、缶の回収を始めました。

これにより、各戸からリサイクルできる資源がどれほど排出されている

かがわかりました。これは自主的な活動でした。赤羽さんは通常の業務以外でこの活動に参加し、大変なご苦労だったと思います。この活動が八王子市の「リサイクル条例」を作るきっかけとなりました。処分場問題を解決する一助にもなると、この活動に意義を見出しました。

Q ごみかんに入会してくださったきっかけは何ですか？

A 1990年代初めに日の出町の「三多摩地区ごみ最終処分場」の汚染水問題を知りました。八王子市が大量のごみを持ち込んでいるため、市民としてこの問題に取り組む必要を強く感じました。

そんな時、ごみかんが三多摩地区の環境問題に関心もつ集まりなのを知り、ぜひこの会に参加したいと、1998年の発足と同時に入会しました。

Q ごみ問題に関わること以外で趣味や生きがいは？

A いろいろありますが、強いて言えば、生ごみ堆肥を使った畑での農作業です。

Q 特筆すべき近況があれば教えてください。

A 1995年頃「有機農産物普及堆肥化協会」に参加し、各家庭で出る生ごみを堆肥化する普及活動に関わりました。自治体でも堆肥化に取り組むようになってきましたが、生ごみ堆肥をどのように活用するかが課題として残りました。そこで、近所の農家から畑を借りて仲間数人で生ごみ堆肥を使って野菜を育てることにしました。最初の年には大根、じゃ

がいもなどを収穫。今年はねぎ、里芋、にんじんなども作れるようになりました。今後は自分たちで種をとり、自家採種した作物を育てたいです。

生ごみ堆肥に関する困り事の相談も承っています。最近では「庭の生ごみ堆肥にミミズが大量発生してしまう」との相談を受けました。日本の住宅事情から庭に生ごみを埋め続けるのには限界があり、近くの農家との連携の必要性も今後の課題です。

また、長年望んでいた大規模生ごみ堆肥化工場が八王子バイオマスセンターとして営業開始し、臭いもなく順調に稼働しています。八王子市内の学校給食、または給食センターから出る生ごみは「すべて」堆肥化されるようになりました。画期的なことです。

これからは家庭から出る生ごみも市の分別回収ができるよう期待しています。その堆肥を八王子の農家が使い、子どもたちの給食に使われるようになれば、循環の輪が完成します。「有機野菜で学校の給食を」の声も高まっていますので、大いにチャンスがあると思っています。

Q ごみかんに期待したいこと、あるいは提案したいことは？

A ロシアのウクライナ侵攻により原油高となり、化石燃料からのエネルギー転換が迫られています。

日本でも生ごみからバイオガス発電を行う事業が本格化しようとしています。北海道の自治体ではすでにバイオガスで作った電気を各戸に供給しています。今後、バイオマス事業を農業と両立するかたちで進んでほしいと思います。将来は生ごみの争奪戦になるかも？ ごみかんでもバイオマス発電の可能性や問題点などを取り上げてほしいです。